

俳人成田千空研究会

千空研究

第9号

万緑や目屋人形はみな乙女

—千空句版画—

藤田 健次



千空さんの第5句集『忘年』から。炭俵を背負った娘さんが、目屋深山の、緑いっぱいの山道を下る姿がわーっと目の前に広がり、テーマは即座に決定。

彫るにあたり、地元商工会から実際の人形一体を取り寄せた。胸と腰の、なんとふっくらと豊かなこと。野良着はスリットが入ったおしゃべり。そして、その野良着の中は、しっかりと白い下着を穿いていたのである。人形製作者の、目屋の娘さんたちに対するやさしいまなざしに脱帽。版画は一気に完成した。

(版画家・会員／八戸市)

目次

万緑や目屋人形はみな乙女

—千空句版画—

藤田 健次 1

〈回想の成田千空〉

千空さんの瞳

佐藤 繁 2

不思議な縁 千空さんの思い出 浜田しげる 3

千空さんと、戦死した兄と 佐々木達司 4

千空資料研究①

「青嶺」創刊十五周年大会記念講演

西谷ともえ 5

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(8)

「暖鳥文庫」からのスタート 齋藤 美穂 6

〈作品鑑賞を読む〉⑧

五月来る夜空の色のインク壺 飯田 龍太 7

〈千空点描〉句集名付けの秘密

〈成田千空資料再録〉⑨

『萬緑』師・中村草田男の千空句評②

会員名簿・北極星

12

9

4

7

6

5

4

3

2

1

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

回想の成田千空

千空さんの瞳^め

佐藤 繁^{しげし}

中学時代、私は松尾芭蕉の句に夢中になり、高校に入った頃、増田手古奈先生に傾倒し、毎月、俳誌『十和田』を楽しみにしていました。しかし、自分の凡才を棚にあげ、十和田俳句に飽きが来ました。

その当時、寺山修司の俳句が大反響を呼び、県内では川口爽郎や成田千空の名が広く知れわたっていました。

私は生来、思いたったら、すぐ行動する性質でしたから、まずは岩木町の石田蒲団屋を訪ねました。たしか望洋という名でした。『萬緑』について、何か知りたいとの思いで訪問しました。しかし、ここでは門前払い同然にあしらわれ、昭和二十二年、二十歳すぎの冬、全く面識のない千空さんの家を訪ねました。突然の訪問でした。

五所川原の駅を出て、道みち千空さんの所在を尋ね、やがて小さな古本屋にたどりつきました。引き戸を開けて一歩足を踏み入れたところ、店内は山と積まれた古書があふれ、歩くのがやっとでした。

俳句のこと、俳誌『萬緑』のことを知りたくて参りましたと言うと、さっそく中に招き入れてくれました。少し奥まったところに椅子席のこたつ

があり、そのこたつに温もりながら対面しました。二十歳そこそこの私を下目に見るでもなく、真摯な態度で話が弾みました。千空さんの口から出ることを傾聴し、俳句にかける情熱をひしひと感じました。

江戸時代から今日までの俳句の流れ、現俳壇の状況、特に著名な俳人とその作品等を途切れることなく話され、私は大学の学生ながら講義を聴いている錯覚に陥りました。とうとうと話が弾む中、突然、松尾芭蕉を読んだことがあるかとの問い、私の目を見据えるのでした。一瞬、身がすくみ、まともに答えることのできない自分に恥入り、身がちぢむ思いをしたのでした。また、今、国内に名をとどろかせている寺山修司の俳句をどう思うかとも問い、私が答える先に、自分は青森に住んでいた頃、当時、中学生であった修司の俳句を指導したものだ。修司の俳句には著名人作に手を加えた、本歌取りの才能があると渋い顔で話されたものでした。このあたりになると千空さんの語気は勢いを増し、いよいよ熱を帯び、ただ自分が師と仰ぐ中村草田男は意外なことに修司を高く評価しているとも言い、内心忸怩たる思いだったように思われました。草田男来青の折、十和田湖に案内したこと、一句をものにしようと石に腰をおろし、何十分も動かさず、日程の先が危ぶまれたことなどのこぼれ話も聞かされ愉しい時間を過ごしました。

千空さんの思いを胸におさめ、店の外に出たとき、すでに短日の陽が西に傾きかけていました。若造で、何も知らない私との別れを惜しむかのように庭に出て佇んでいました。肩に降りつもる雪を手で払いながら、私を見送ってくれました。千

空さんの温いまなざしを背にして通りに出ました。道々、千空さんの

大粒の雨降る青田母の故郷^{むら}

を反芻し、中村草田男の

炎熱や勝利の如き地の明るさ

を口ずさんでいました。

それから三年後、初任の鯨ヶ沢町の中学校から森田村の育成中学校に転任となり、それを機に下宿を五所川原に移しました。下宿の隣が公民館で、そこで句会がもたれており、さっそくに仲間入りさせてもらいました。敦賀晴川、尾崎泉草、前田水馬、増田木巨子等、力のある方がたの先頭に立つ千空さんは大人の風格そのものでした。月見句会では終わって、ぞろぞろ、月を仰ぎながら木巨子先生宅へ向かい、最上等のお酒を酌み交わしました。また、ある時は吟行に出ました。飯詰をまわって吹畑の和田山蘭宅の座敷に上がり、額縁の写真を見、かつて若山牧水が当地に来られた時の記念写真でセピア色とは言え、歌詠みの面々がしっかりと拝見できました。

齢とともに記憶がすれて参りましたが、今も昨日のことのように目頭に頭ち来る光景の中に、千空さんはその名に違わず泰然自若、大人の風格そのものです。千空さんの名を聴くと、きまって胸のうちがほかほかと温もるように思われます。昨年、こんな一首が口をついて出てきました。

熱っぽく寺山修司の句を語る千空の瞳^めにかがやき見たり

(歩道弘前短歌会／弘前市)

不思議な縁 千空さんの思い出

浜田しげる

平成十九年の春だったと思う。五所川原市で開かれた千空さんの句集「十方吟」出版祝賀会に参加した時のことは今でも忘れられない。萬緑会員である妻の榊せい子と受付を済ませた後、その場にいた千空さんに「出版おめでとうございます。

萬緑の会員ではないのですが、来てしましました」と、話しかけた時である。「しげるさん歓迎しますよ」と言いながら私の肩に手を回して会場に招き入れてくれた。三、四日前に急遽申し込んだ、いわば飛び入り参加だっただけに、千空さんの応対に恐縮し、感激するばかりであった。

会場では市子夫人と話が盛り上がった。市子夫人の父上が私の会社の大先輩だったこと、また、千空さんが結婚当初から新妻に構わず俳句会に出かけ、留守がちだったことなど、市子夫人が昔を懐かしむように話していた。そんな話を聞き、「俳句命」の千空さんだった、とつくづく思ったものである。

後で聞いた話だが、千空さんは「この祝賀会は生前葬のようなもの」と言っていたとか。そういえば、会場での振る舞いは女性会員と記念写真を撮るなど随分和やかで、祝賀会の雰囲気を中心に喜んでいたようであった。病のことを一時、封印していたのかもしれない。この後、数カ月して千空さんは亡くなった。私にすれば生前葬に出席でき、朗らかに振る舞う千空さんとひとときを過ご

したことが何よりもうれしいことだった。

振り返ると、千空さんとは不思議な縁を感じている。最初の出会いは平成元年の夏、五所川原市の成田書店であった。当時、私は東奥日報の記者として大鰐の俳人・増田手古奈さんの俳句人生「つらつら椿」を紙上に連載しており、手古奈評を聞くための訪問だった。

書店は古書店の雰囲気、本が店内に溢れていた。その一角のそんなに広くないスペースに事務机が置かれ、その上には本がうず高く積まれていた。そこが店主の席、千空さんは椅子にどっかりと座り、にこにこしながら私のインタビュに応じた。今でもその時の情景が目につかぶ。思案深げに「手古奈さんの俳句は情景が見えてきて一幅の絵になっている。私にはああいう俳句は作れない」とコメントした。俳句の門外漢だった私は「手古奈さんはすごい人、千空さんも及ばぬ存在なんだ」と感心したものだ。

だが、後に千空さんが言った意味を私が誤解していたことを知るようになる。それは手古奈さんと千空さんが目指す俳句が違うということ。だから、ああいう俳句は「作れないというよりは作らない」というのが正しい言い方だったようだ。

その時にこんなことも言われた、「県内の俳壇はホトトギス系ばかりではありません。石楠系の人たちも存在感を示しています」と。臼田亜浪の系譜に繋がる人たちのことを言ったのだった。大野林火が主宰する「濱」で活躍していた八戸の木附沢麦青さんらのこと、そればかりではなく、県内にはいろいろな結社があることを教わった。

そして次は俳誌での選者と投句者である。私が俳句を作り始めたのは平成二年ごろ。会社の仲間

が集まって土筆句会を立ち上げ、月一回ぐらいのペースで会社の和室で句会を開いていた。そんな時、俳誌「埠頭」が創刊され、土筆句会のメンバーの大半が埠頭に投句した。その時の埠頭集選者が千空さんである。

選は厳しく、とられてもせいぜい三句。たまに四句である。ところが、巻頭に次ぐ二席の五句をとられたことがある。むつ支局在勤中の作でそのうちの一句「むつ湾は蝶の形や夏夜景」は千空さんに選評をいただき、励まされた句で、随分励みになったものである。

千空さんが「見たままを詠むこと。しかし、説明してはいけません。そしてリアリティです」と言っていた言葉を思い出す。

考えてみると、私が俳句雑誌の会員になり初めて選を仰いだのが千空さん。私にとって千空さんは初学のころの師である。

その後、仕事が忙しくなり十年以上休俳、今は千空さんが一目置いていた麦青さんが代表の「青嶺」に入っている。手古奈、千空、麦青―「これも縁」なのかな、と思う。

話は変わるが、平成元年、東奥日報の俳句大会の特別選者で来青した小熊座主宰の佐藤鬼房さんは懇親会の席上「千空さんはもっと早く俳人協会賞を貰っていてもおかしくなかった」と語った。俳壇で千空さんは過小評価されていると言いたかったようだ。だが、その後千空さんは蛇笏賞をとり、誰もが認める文字通り俳壇を代表する俳人となった。まさに異俳壇の誇りである。

千空さんの代表句「大粒の雨ふる青田母のくに」の色紙が我が家の床の間に飾ってある。時々、ふっと、千空さんのことを思い出すことがある。

そして、「精進、精進」と呪文を唱えながら俳句を作っている。（「青嶺」同人、俳人協会会員／青森市）

千空さんと、戦死した兄と

佐々木達司

千空さんと、戦死した私の兄とは何の関係もないが、私の中ではしばしば、オーバーラップするのである。

千空さんに初めてお目にかかったのは、『津軽文学』桜桃忌記念文芸の選者依頼だったので、確か昭和35（1960）年だったと思う。

賞の趣旨や方法などについていろいろ聞かれたが、妥協を許さない鋭い眼差しだった。「怖い人だった」という印象がある。

晩年の千空さんは、すっかり好々爺になってしまっていて、誰もが優しい人だと言う。若い時の厳しい千空さんを知る人は少ない。

亡くなられるまで47年間の付き合いとなり、文芸協会理事長就任からの22年間は、事務局担当として頻繁に行き来した。

千空さんを心から尊敬していたが、わざと怒らせるような質問をしたり、友達のような口をきいたりしていた。私は知らず知らずのうちに千空さんを、戦死した次兄・周造の代わりにしていたのかも知れないと、今ごろになって思うのである。

千空さんの才能に比べべきもないが、兄は本好きで詩や短歌を作っていたので、私は多くの影響

を受けている。最近、気になって調べてみると、多くの共通点があった。

①〈誕生日は1日違い〉

千空さんは大正10（1921）年3月31日、兄は1日遅れの4月1日だった。2人とも早生まれで、昭和2年4月に入学している。尋常小学校では最年少だったから体力では劣っていたはずである。

②〈本好きで近眼〉

2人とも本が好き、近眼で眼鏡をかけていた。千空さんはたくさん本を読んでいて、ノートをとっていた。細かいペン字で書かれたそれは、まるで講義ノートのようである。兄は夜遅くまで本を読んでいる、充血した目で起きてきた。祖母に「昨夜、また本を読んでいたね。鯨のような赤い目をして」と叱られていた。戦後の新刊が出なかった時期、千空さんは義兄晴秋の遺した俳書を読んだ。過ぎたという。私は兄の遺した文芸書を読んだ。

③〈結核で自宅療養〉

兄は昭和15年に結核を患い、千空さんは翌16年に発病し東京から帰郷している。ともに実家で療養生活を送っていた。当時は治療法がなく安静にしているだけ。医者に「栄養を摂れ」と言われても、卵も牛乳も手に入らない時代だった。

④〈徴兵検査は丙種〉

千空さんも兄も徴兵検査では丙種だった。甲種・乙種は兵役に最適とされたが、丙種は身体に欠陥が多い者で、現役に不適とされていた。しかし戦争末期になると丙種でも召集されるようになった。兄は出征し、千空さんは征かなかったが、この差は紙一重である。

⑤〈へ生きた証の詩集・句集〉

兄は帯広の部隊で結核が再発し、旭川陸軍病院

【千空点描】

句集名付けの秘密

千空さんの第1句集『地霊』は、田んぼを耕しながら詠んだ句だから必然の題だった。続いての『人日』は七草粥を食べる正月7日のこと。第3句集は天の入り口『天門』。書名を決めたとき、「これで天地人が揃ったよ」と嬉しそうだった。天地人は世界を構成する要素で万物を表す。

続く『白光』は77歳、脂の乗っていた時期で光の世界に羽ばたくよう。「なんだか、このごろ死なないうような気がしてきたよ」と言っていた。

『忘年』は79歳、年を忘れたいのは八十路前の実感だろう。第6句集『十方吟』は86歳、大病を繰り返しながら老後に大仕事をなし遂げた。まさに極楽浄土の世界である。

行きゆきて雪の十方浄土かな（萬緑）
彼岸を見据えているかのようである。（佐）

に入院した。療養中に手作りした詩集「花ひとつ」（2分冊）を、4歳下の妹に「形見にせよ」と遺し、南方戦線に送られニューギニア島で戦死した。千空さんは戦時下の昭和20年、手作りの句集「千空句帖」を作っていた。丙種でもいつ召集されるかも分からなかったし、空襲もあって死を覚悟していた日々だった。「千空句帖」も、生の証として作られたのではと、思えてならないのである。

（千空研究会代表／五所川原市）

「青嶺」創刊十五周年大会記念講演

西谷 ともえ

平成二十八年三月、青森県俳句懇話会より六百三十点あまりの資料が青森県近代文学館に寄贈された。その中に成田千空関係資料が十点ほどあった。大抵は2月25日(土)～5月24日(水)開催の「青森県俳句懇話会寄贈資料展」で実物を紹介するので、そちらをご覧いただきたいのであるが、展示できない素晴らしい資料が手に入ったので、ここでご紹介する。

木附沢麦青が主宰する「青嶺」創刊二十五周年・三百号記念青嶺祭(平成二十一年九月二十七日)において記念事業実行委員会が作成した「青嶺」記念大会講演記録集である。もともとは四枚のCDが収められていたようであるが、寄贈時には三枚で、それぞれ、五周年大会の上田五千石「俳句とは何か」、十周年大会の福田甲子雄「風土と俳句」、そして十五周年大会の成田千空「俳句雑感」である。

「青嶺」(平成十一年五月号)掲載の開催案内によると、創刊十五周年記念第三回青嶺祭というのが大会の正式名称で、平成十一年五月二十九日(土)午後一時から、八戸市のホテルよねくらに於いて開催されたようだ。資料のCDには約五十分間の千空さんの講演が収録されている。講演のほとんどは「青嶺」(平成十一年九月号)に翻字掲載されて

いるが、省略されたり、要約されたりしている部分があるので、ご紹介したい。

「俳句雑感」と題されたこの講演で、千空さんは①導入②麦青の俳句③県南俳句史の大きく三つの話題を提供している。

冒頭、「口下手で通っている成田千空です。」とはじまり、会場の笑いを誘った。蛇笏賞受賞パーティーのスピーチを紹介する中、まず自身が「中村草田男門の成田千空です。」と言ったことが評判を呼んでいることに触れた。西島麦南が「生涯蛇笏の門」と言っただけからなかったことを例に、「一人に付くということが、俳句界では極めて普通であったのに、最近は大変多極化して参りまして、そういうことがなくなつたのか」と思うと述べ、要は今時、一人の門にいたと言ったことがショックキングだったのでないかというように述べている。「俳句」(平成二十年二月号)に黒田杏子がこのエピソードを紹介し、藤田湘子に「杏ちゃん、千空はいいねえ。中村草田男門の成田千空です。カッコいいよ。千空は偉い。立派だ。師弟つのはああいうもんだねえ。」と言われたと書いた。今時一人の門にいたことに加えて、蛇笏賞を取るような偉大な俳人となつてなお一人の師匠を大切にしていることに周囲は感動したのであるが、千空さんは謙虚であった。

また草田男は本人曰く非完の作家であり、晩年は句集を出さず湧き出るように俳句を生み出していたと語った。

次に本題に入り、麦青の俳句について話した。まず、岩手県で育った麦青が高校時代にまず短歌で才能を発揮し、佐藤佐太郎に「歩道」に入るよう勧められたこと、その後俳句と出会い、短歌を捨てて、大野林火の「濱」で活躍。その後八戸の「北鈴」に参加することを紹介した。また、昭和四十年角川俳句賞受賞しながらも取り消しとなり、翌年再受賞したことに触れ、麦青について、「右手で俳句を作る」作家であり、「青森県に何人もいない作家」だと語った。飯田龍太が「右手、すなわち本業をがっちりやって、左手で俳句を作りなさい」と言つたという言葉を引用し、太宰や志功は左手で作品を生み出したのではない、俳句も左手では生み出せないと展開し、麦青の姿勢を讃えた。

また麦青は風土性俳句をテーマとしつつも、風雅の世界を大切にしたい俳句を目指していると、注目すべき作家だとまとめた。

麦青の俳句史に触れつつ、八戸の俳句史についても言及した。北村古心が旧派の俳諧の伝統を守つたことで、子規の近代俳句は八戸になかなか入つてこなかったが、古心と対立した島森静翠居が俳誌「玫瑰」を発行して八戸に新しい俳句をもたらしたと語った。

最後に上北町出身の大塚甲山を紹介し、なかなか知られてこなかったが、県俳壇を語るうえで非常に重要な一人であるとし、会場の八戸「青嶺」同人たちには是非彼を研究してほしいと訴えた。また、甲山が素晴らしいのはその作品だけでなく、明治という俳句の黎明期にあって、「俳句という

文芸の極は散文リズム」にあると予言している先見の明に触れた。

講演内容紹介は以上である。千空さんの音声資料は意外なことに文学館にあまり所蔵されておらず、このほかには『地霊』出版記念会の挨拶、平成十六年の千空対談の様子、平成十八年の「千空が語る文学と故郷」の三つのみである。講演の数も相当数にのぼると思われる。皆さんからの資料提供をお願いしたい。

(青森県近代文学館文学専門主幹・副室長／青森市)

―永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(8)―

「暖鳥文庫」からのスタート

齋藤 美穂

逃げるな

食ふために生きるなんて眞っ平御免
もっとなりもふりもかまわず、勿論かくしだ
でなどはせず、従って恥づかしがらないで俳
句をつくるように性ねを握えないかぎり、い
つまで経っても、「縣俳壇の成田千空」から
一步も飛躍出来ないことを知るべきである。
「名」ではない。僕は「實」のある僕になり
たいのだ。(昭和二十二年「飯詰日記」抜粋)

千空さんは飯詰村で「大地を鏡として働く」百姓と共に汗を流すことによって、「僕の俳句を、芸術と名のつくものにしたのだ。道ばたの雑草に終らせたくないのだ」と強く決意していきます。

晴耕雨読の成田力ではなく、俳人・成田千空として生活を始める時がようやく来たのです。

一九四九(昭和二十四)年九月、上京して出版物の取次会社と契約し、師と仰ぐ中村草田男とも初めて面会を果たしました。胸をよぎる女性に直接会って心に踏ん切りをつけると、結婚問題をより現実的に考えることにしました(この上京については既刊『中村草田男訪問記』に詳しい)。「食ふために生きるなんて眞っ平御免」という強い言葉からは、戦争や病を乗り越え、目指すべきはるかな一点を見据えた並々ならぬ決意が感じられます。

ゆきずりに「何故さ」と言葉深雪道

大きな石地上に置かれ春風吹く

逃げるな (日記「1950」抜粋)

書店開業

文学を志す従兄とともに隣町の五所川原に開業した書店は「暖鳥文庫」と名付けられました。「鎌倉文庫」「津軽書房」……まだまだ生活も困難な時代であって、文学の価値を信じてやまない人々に感じての命名でした。テレビもない時代です。貸本屋は町のあちらこちらに在ったようです。その中で「暖鳥文庫」は、いつか文学で世に出ようという若者の出発点となる書店でした。身の回りの本を並べ、新しい生活が始まりました。夏。私の店はきれいに掃いて清めて、香をたぐの。すると、上もしたも眞白な夏装束の人々がふらりと寄ってついと入って来る。青々とした山のはざまの清冽な流れにひっそり糸を垂れて岩魚かなんか釣ってある気持。当時の日記には詩情をたたえた清明な心情が綴られています。

五所川原は青森市のような空襲による被害はありませんでしたが、終戦をはさんで二度の大火に遭い、壊滅してしまつた市街地を復興するにはまだなすべきことが残されていました。大火以前に存在した町並み、活気、独自の文化の中に、二度と取り戻すことのできないものがありました。しかし、周辺の町村からやって来る多くの買い物客を見込んで、商売で成功しようというさまざまな人々の流入があり、不屈の商人魂で新しいまちづくりが進められていたのです。

そのうちに、町の文学青年や絵画青年たちが出入りするようになり、店がサロンのようになりました。

(『俳句は欲びの文学』成田千空著)

千空さんはこの書店から町に文化的なものを広げたいと考えていました。「ゆくゆくは画廊を備えた書店にする」という夢があったのです。昭和二十五年の日記帳には夢の見取り図を確認することができます。

妻を迎えて

昭和二十六年四月二十日、青森では観桜会が催される頃、千空さんは石塚市子(青森市出身)と結婚しました。結婚前に二人が会ったのはたった二回だったといひます。

「いづれ図書館か学校に勤める人なのだから心配いりません。俳句をなさる方なのだからですよ」と言う仲人の言葉もあり、市子さんは、年齢も若すぎず、背が高い青年への返事を決めていました。家族が助け合つて暮らしているという成田家の評判を周囲から聞き及び、父親も背中を押した縁談でした。

市子さんの父親は地元紙・東奥日報の社員、母は板画家・棟方志功と再従兄弟でした。

「それは俳人である千空にとって、嫁に迎える気持ちに加担したかもしれない」と、市子さんはデートもない時代の結婚について話しています。

青森で結婚式を挙げた数日後、二人はバスで五所川原へやってきました。五所川原は市子さんにとって初めての土地です。新町の停留所で降りると道の向かい側に「暖鳥文庫」がありました。現在は建物も取り壊され、増田病院の駐車場になっています。

「あれが僕の店だ」と言われて見た建物は、市子さんが想像していた書店とは大きく異なっていました。

間口二間ほどの小さな店にカーキ色のカーテン、店の脇の細長い土間に井戸と流しがあり、暗くなればそこにロウソクを立てて炊事をしました。店の奥にある部屋は、菓子屋を営む大家さんの家と襖一枚でつながっていました。暗い部屋の唯一の明かり窓にはガラスがなく障子紙から雨雪が吹き込みました。母屋の外にある厠の冬の寒さ。井戸の扱いにも慣れない市子さんは、水を吸って重くなった釣瓶をつなぐ縄を滑車から外しては千空さんに助けを求めました。朝は「昨日はもうかりましたか」とあいさつを交わし、商品を渡すと同時に代金を催促する手が差し出される——商人の町とはこういうものかと驚きました。貸本からあがる日銭を蓄え、家賃を納めるとほっとするという暮らしだったのです。

「千空は生活の不満、人の陰口は一切口にしない人でした。千空という人間を知り、俳人としての生き方に共感し尊敬できるようになり、私も変

わっていったのだと思います」と市子さんは当時を振り返ります。かつて千空さんは実家での質実な暮らしの中で「なんでもよいから突き抜けなさい」と母に教えられたといいます。町の近代化が進み、人々の暮らしに豊かさが現れても、夫婦の質素な暮らしはほとんど変わりませんでした。それは俳人としての生涯を全うした千空さんの意思でもあったのではないのでしょうか。

中村草田男の来青

一九五一（昭和二十六年）八月、東奥日報社主催の青森県俳句大会に俳人・中村草田男が招かれました。「戦後の俳句界を担って立つ存在」である俳人の話を聴きたいと、結社やジャンルを超えて歓迎され、会場はどこも盛況だったと千空さんは回想しています。二人が結婚して四ヶ月後のことでした。市子さんは、会場探しなどの準備に奔走している夫に張り詰めた空気を感じたそうです。五所川原の駅から会場までの道で、「俳人と一緒になられた方は大変ご苦労なさいますが、千空さんをよろしく願います」と草田男先生に頭を下げられたことは、忘れられない出来事でした。「後になってその言葉の意味を考えると、千空を俳人として生きていく人間だと認めてくださった、ということではないでしょうか」それは温かくも、相当な覚悟を促す言葉でした。

俳人としての使命感

市子さんは夫に俳句を勧められることもなく、家の中に置かれた雑誌「萬緑」を手にとるようになり、ひそかに俳句を始めました。

「子供もいない私たちの会話はどうしても俳句

【作品鑑賞を読む】⑧

五月来る夜空の色のインク壺

「萬緑」七月号より。

作者は青森県五所川原市在住。インクは濃紺が一般。そんなホンモノの夜空は、もとより大都会にはもうないだろう。五所川原でもいまははたしてどんなものか、と思われるが、この句は、目の前のインク壺から思い浮かべた夜空である。

それも百花競い咲く北国の五月の夜。つまり、作者の脳裡に幼いころから住みついている夜空の色だ。そこに独特の風土感が垣間見える。

『雲母』平成4年8月終刊号

「秀作について」飯田龍太より

飯田龍太は山梨県出身の俳人。飯田蛇笏の四男で蛇笏を継ぎ俳誌「雲母」を主宰。

飯田蛇笏に因んで設けられた蛇笏賞は、句集の中で最も優れたものに与えられる俳句界では最も権威ある賞で、角川文化振興財団が主催している。千空は平成10年、『白光』で第32回蛇笏賞を受賞し、14年から亡くなる19年まで選考委員を務めた。

中心の話になりました。とにかく、萬緑と草田男先生の話です」とはいうものの、夫から直接に俳句の指導を受けるようなことはなかったそうです。むしろ千空さんが萬緑の選者になってからは、投句前の自分の俳句が家内で目に触れないようにと戒めました。市子さんが萬緑賞の候補に挙がった

時は「萬緑賞をもらうことは確かに嬉しいことだよ。けれど受賞後はそれに恥じない俳句を生みだし続ける覚悟が必要だ。賞というものは喜んでばかりいられないものだ。その覚悟があるのなら、受けければ良い」と言われ、賞を辞退したそうです。そこには、夫婦でもなく師弟でもない、俳句の同士に対する厳しさを感じます。

——一句でも世に残るような俳句を作りたい。賞が欲しい、有名になりたいと思って作った句は一句たりともない。しかし賞を受ける以上、その賞に恥じない仕事をしていかなければならないのだ——千空さんの俳人としての使命感は揺るぎませんでした。作品だけではなく、選句や評論など、六十年余りの仕事の数々は自らを裏切ることのない信念とともに成されていったのです。

俳人という職業

さて、五所川原で取材をすると、地元の人々の記憶にある千空さんは大抵「本を読むか、物を書いている寡黙な店主」だったといえます。「本を読み、物を書く」仕事とはどのようなものであったのでしょうか。

書籍の荷解きと配達、帳簿付けなどの書店の仕事、冬は雪かきの重労働。そして町内の人々や句会の仲間が次々と訪れる店内の机で、全国から送られてくる受贈誌や句集に対する礼状に感想を添えて送り、結社や出版社から依頼される数々の原稿を仕上げ、大会や俳誌編纂の選評作業のため、何千句という作品に目を通していました。評論を伴う仕事では「ノートする」という作業を欠かさず、作品を書き写して吟味していたようです。「大変だが発見もある。作品を送ってくる人の期待に

も応えたい。おろそかにはできないのだ」というまじめでひたむきな千空さんの人柄がしのばれます。

町の小さな書店の片隅で、「寡黙な店主」が全国を相手にこれほどの仕事を抱えていたとは、ちよっと想像できないことでした。俳人・成田千空の名が全国に広まるにつれて求められる仕事は増え、小さな書店に山積みになりました。来客の応対も市子さんに任せたまま黙々と机に向かう姿が「近寄りがたい店主」に見えることがあったか



第1回萬緑賞発表（雑誌表紙と掲載ページ冒頭）

もしれません。句会や大会の出席で店を空けるためには、早朝や晩であっても片付けておかなければならない用事もありました。

「吟行をしないと句が弱くなっていく」と多忙を極めた後年の日記にはつぶやくように書かれています。千空さんは店番を市子さんに任せて自転車で出掛けていくことを日課にしていました。麦わら帽子をかぶり、胸ポケットには折りたたんだ紙と鉛筆——近くの土手や時には遠出となることもありました。出勤前、土手を廻って季節の移ろいを確かめました。

千空さんの日常は全てが俳人としての暮らしであることにあらためて気づかされます。二十代で俳句の道を志してから、「暖鳥文庫」は生涯、訪問客を迎える窓口であり、俳人・成田千空の仕事場であり続けました。

第一回萬緑賞受賞の反響

昭和二十八年、千空さんは第一回萬緑賞を受賞します。戦後間もなく中村草田男が創刊した『萬緑』の五十号を記念して設けられた賞です。

この受賞で東北の俳人・成田千空への注目度は一挙に高まりました。それは県の俳壇にも刺激を与えることとなり、活性化への契機になったと思います。千空さんは作品と評論を全国的な俳句雑誌に発表する一方で、句会や大会の在り方、また県内結社を超えた活動を模索し成果を出していきましました。

次回は受賞後の多彩な活躍について辿っていきます。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

師・中村草田男の千空句評 ②

『萬緑』昭和25年6・7月号「作品欄批評」から抜粋

嫁く意あらぬ林檎の疵に爪たて、 成田千空

一人の處女が、沈黙の姿態のまゝで、ある縁談に對する肯定せざる意志を表示してゐる。——これだけの題材ならば決して珍しくはない。題材の意味設定にとゞまらず、それが具體化されてゐて、讀者としての我々が直接に、そこにさながらの現世のいぶきを感得する。その度合ひが常に作品の生き死にの根本を基定してゐるのである。以下解説がやゝこまかくなり過ぎるかもしれないが——人々はいつたい林檎の疵といふものをハッキリ知つてゐるであらうか。皮越しにちよつと打撃を受けただけで、林檎の果肉は内出血のやうに皮の内側でいたむ。そしてアクが集注することによつて、その部分がいちはやく部分的に乾いて茶色のかすかな空洞をかたちづくる。従つて、その部分の表皮は、三角形の各頂點から中央の重心へ落ちあふ線を引いたやうに、一點から三方へさけ目が出てくる。食後の食卓かなにかで、やゝもちこされた本意な縁談に對して、今、可成り明瞭な返答を求められた際に、或處女が、あぐねた氣持のまゝに目前の林檎をとりあげて、手の平の上で沈黙の裡にそろそろ廻轉させてゐるうちに今いつたやうな傷が眼につけば、半ば開けかけになつてゐるカーテンのやうな、又は語るのでもなく沈黙してゐるのでもない兎唇めいたひらき具合

を示してゐる林檎の傷口は、思はず一種のイライラした氣持をささひおこして思はず爪を、三角形の底邊にあたるころへグツと強くたてゝみるようになるのは極く自然である。しかも梨などのやうに堅い果肉ではなくて、脆い質でできてゐる林檎の果肉壁である。それへ敢えて爪の攻撃を加へることは、さして、つゝしみなき亂暴な動作とはいへないわけである。三回四回爪を立てゝ抉つてゐれば、茶色の傷の部分、すつかり除けられて、眞赤な林檎の面に眞白な窪い部分が出現する。女主人公には、その印象が——快からざる障礙が易々と撤去されて、明るい希望がひろがつてゆくのと共通した感銘を無意識裡に與へるのである。それに女性なるものに於ては——殊に處女に於ては——意志表示の直接の動作に踏み出すことにテイミッドであるにかゝはず、決してまげようとはしないところの自分自身の意志を、なんらかの裏返された表示動作にあらはずことには相當に積極的な本性を發揮する。林檎の疵に爪をたてるくらひにとゞまらず、——實に何氣なく、本人は果敢と毛頭意識しない一種の果敢さで、他人と對立してゐる時間の経過のままにゆつくりと、一箱のマツチの軸くらひは全部折つてしまひ、ちよつとした重要な印刷物くらひは、小隅から缺いてゆくにつれて、いつしか全部を消滅さしてしまひかねないのである。そこに永遠から永遠へ持續される「女性的なるもの」が存在する。最近福田恒存氏は、どこかでの批評の一文で幸田文、平林たい子其他の女流作家の作品中に發揮されてゐる女性特有の心のうごきを、すべて根底あさき、人間としての「いやらしきもの」に總括して排撃したが、たゞ單に男性の立場からだけの觀察と要求とを以て、男性の世界のそれと様相方向が異なるからとの理由を以て「女性的なるもの」を一括排撃してみてもそこにはなにも始まりはしない。「女性なるもの」に關して思念をめぐらす出發點となるべきものを福田氏は直

ちに以て結論の基盤にしてみましたやうなおもむきである。この林檎の疵の句には女のいぶきがあり、人生のいぶきがある。これらの「いぶき」を感得し得ない人にとつては、「女のはらだたしさ」だけが、堂々たる言説としてのこつて、「女のいぢらしさ」の生きた事實の方は、あはれにも雲散霧消「本來なきに等し」といふことになつてしまふのである。

何故こゝに斯くまで冗長な解説言を述べたかといふに——現在の俳壇では、作品以前の實生活に於ける諸事諸物の觀察が綿密にねんごろに積まれてゐると察しられる場合が誠に稀であり、且又、いろんな俳誌の主宰者の作品評が、餘りにもしばしば、題材の意味設定の指摘にとゞまつてゐて、人生のいぶき、其物の感應度を示して呉れてゐることは、これ亦、誠に稀であるからである。實作に於ても鑑賞に於ても一般的に甚しくキメが荒くすさんでしまつてゐる感じがする。——これは決して、諷詠の寫生の規準をそのまゝに移してきて、さういふのではない。

此「林檎の疵」の句に於ては、「嫁く意なき」とせずして「嫁く意あらぬ」とした微妙な差異、かつ連體形をもつて「林檎」といふ言葉に直結させて、すべてを林檎の姿の中に結晶さし封入さしてゐる點などにも、手柄のあることを見おとしはいけない。

獵人が示しし泉つめたしや 成田千空

示した獵人は土地の者、示された方は旅の者。此句には、時間の経緯が背後にひかれてゐて、しかも終りの部分「つめたかり」などとしなないで、「つめたしや」と現在になつてゐるので、掌を盃形にして目下飲みつゝある水の冷たさの實感が切實である。「示せし」の表現の正常さよりも、「示しし泉」の方が、「し」の音の重なりによつて、やはり冷感を強めるに役立つてゐるだらう。

今回は、先の句に就て、鑑賞にはいきいきとした細かい味覚のはたらきが伴つてゐなければならぬことを注意したので、尙ほ此句に就ても、もう一つさゝいな點への注意をうながして置かう。若し「獵人が教へし」であつたならば、どうであらうか。單なる意味設定である。「示し」であつてこそ、銃を肩にしたまゝで、半ば身體を來た方角へふりむけて、片手をあげて、泉の所在するあたりを教へた其時の獵師の姿が殘像としてハッキリと此句の中にかんできてゐるのである。行き會つて泉を教へて貰つたのがたゞの里人でなくて、獵人であるところにも、「土地の者とても誰でもが知つてゐるといふわけではない程の」木立に掩はれかくされた「隱沼」とでも稱すべき、「すべてから忘れられた如く、其時から、己自らのためにだけ存在してゐた」やうな泉であることが想像される。要するに——現在の時代の經驗の實感として、此句は生きてゐる。このことが、必要なことの全部ではないが、少くとも、必要なことの第一段階ではある。この自覺をないがしろにすると、「現代の俳句」が素材的、概念的立場からのみ、不等に尊重されたり、不平等におとしめられたりする。此句などでも、題材的な表面だけを、粗雑に一べつただけで、「餘りにも昔なりの牧歌的情景だ」などといふ評言がとび出しさうである。

さういふ評言がとび出してゐるが、さういふ評言を口にする人は、對象とする一句が現代の經驗といふ實感の點で、生きてゐるのか、死んでゐるのかの味覚のはたらきを、先づ、十分に備へてゐることだけは、不可缺條件として要求されるものであることを知つて居なければならぬ。

枯野にてかしこみ聴く馬上よりの言

といふ句を、本誌のかなり以前の號で採つたところが、早速、翌月くらゐに或方面で、「かゝる古くさい、舊時代の句を平氣で採る」と批難されたものであつた。さし

づめ、八幡太郎義家が、歸順以後の安倍宗任を伴つて狩獵に出た場合かなにかに近い情景を私が想像しつゝ、此句を採つたものでも速断したのであらうか。露支亞(露西亞)の地主と農奴——それに近いやうな關係と有様とが、北海道あたりのどこかでは觀られるのであらうと、想像しつゝ、私は此句を採つた。現代の經驗としての實感が此句なりにハッキリと伴つてゐると私は感じたからである。其時の評者はあるひは言ふかもしれない、「それ位のこととはわかつてゐる。たゞ此句が餘りにも封建的なイデオロギーに占められてしまつてゐることを、俺は古いといつたのだ」私の方はイデオロギー以前の一句中の經驗の實感の有無を先づ問題にしてゐるのであるが、イデオロギーの點に關してさへも、私は此一句を必ずしも完全に古いとは思はない。正面切つての大眞面目な戲畫的方法といふものも存在する。

老の緒顔子等の紅顔鯉船來る 成田千空

「來る」は「きたる」と訓まさないで「くる」と訓ますべきだらう。原作では「子ろの紅顔」となつてゐた。戦時の終期から戦後にかけて俳壇の一部では、子供のことを、古語を復活させて「ころ」と表現することが流行したやうである。そして結局、一般的な流行となつてはなかつたやうであるが——それが當然なのである。「子供」又は「子等」で十分である。「子」では一音たりない仕儀になつたから「ころ」として、その空白を補ふといふのでは、古語が泣くであらう。古語雅語の復活使用の問題は、今後慎重に研究を要する問題であるが、(五、七、五の十七音といふ、本來文語脈を基として發展してきた形式を遵奉しつゝ、ある俳句文藝にあつては、一般自由詩の場合のやうに、口語の全般的とりいれを直ちに實行することは不可能だと私は信じてゐる)古語、雅語を用ゐるにしても、それは現代人としての經驗の實

感(勿論それは詩的實感にまでたかめられてゐるところ)を如實に遺憾なく表現するためにのみ必要なのであつて、單なる諷詠趣味でのレトリックのためなどに、斷じて亂用すべきではないのである。「平談俗語を正す」ためにのみ、未來の洗練されたる口語を招來さすためにのみ、古語雅語は其力のいとなみに加はらなければならぬだけである。此句の場合——あらうしくも素朴な此情景の中では、「ころ」などといふ言葉は、不調和どころか、滑稽にさへひびく。

『萬緑』昭和25年11月号「作品欄批評」から抜粋

津輕の東白鳥海に啼く日あり 成田千空
渡り來し白鳥海の波叩き
發たんか白鳥翼に黒き羽はしる
白鳥は海ゆ肩よせ相ひ戻る
殘る白鳥海に風吹き砂を吹く

好調がつゞいてゐることはよろこばしい。殊に今度のものは、忠實な寫生の態度(それは寫生行の實踐をさへ直ちに暗示している)が、一應平淡にみえる各句を、底域に於てそれぞれ根深く据はつたものにしてゐる點がよいと思う。所謂、寫生句にしばしば通弊として見受けられる。へボ將棋的な、めざす對象をあつかいかねて周囲の小ものをたゞむやみに寫すことによつて何とか効果のあがることをねがつて妄動したり、對象の上に生じた變化を機械的なものとして以上には理解し得ないに拘らず、浮腰だつて直ちにそれに追隨して、なにか一歩でも對象の命に肉迫したかのように錯覺したりする状態からは、見事に離れ切つてゐる。だから、細描しないでいて、對象の内側え、作者の感得したものを、こちらからしみ入るようにして肌理として移してしまつてゐる。

「表現」ということに即しつゝ、各句を點検してみよう。

第一句―「津輕の東」という言葉は、明治時代又はそれに隣接した時代の空気を呼吸したのものには、否應なしにある感銘のひびきを與える。斯くいう私自身詳しく記憶しているわけではないが、明治時代の軍歌か、それとも一高の寮歌かなにかの一節に、「津輕の東、風荒れて

……」というのが確かにあつた筈だ、やゝせきこみ、つまづくように強く舌端に押さえて、「つがる」の「つ」のところえアクセントをつける唱いようだけは、舌端の記憶として未だになまなましい。近く深田久彌、太宰治等の作品が、傳えた「津輕」の語の魅力が、よみがえってくることもいなむわけにはいかない。原作は「津輕の東海に白鳥啼く日あり」であつた。そして、作者は、「津輕の東海」と一讀み下ろされ始めることをおそれて、「津輕の東」とルビをふつていた。私の添削はその作者の顧慮を先づ救つたのだが、部分を救つて全體を殺したとは決して思はない。原作は、この海のはれの方をさきにして、その白鳥の中え白鳥の涼々(凜々)しい冴えを生かそうとし、私の添削は、白鳥の凜々しい冴えの方をさきにして、この海のはれを生かそうとしたのだ。しかし、冒頭に「津輕の東」の語の一種の悲愴さがあるのだから、寧ろ私の添削のように、其後えは、急轉「白鳥」の派手な鮮かさの語を置いた方が適切である。

第二句―原作は「渡り鳥白鳥海の波叩き」であつた。遙々と異土へきた鳥というあはれさを「渡り鳥」という成語を以て果たさうとしたのであるが、成語というものによることによつて、思はず慣習の權威に易々と依つてしまつたという難がある。「渡り鳥」の語は、よほど、ひるがえされた自覺の冴えを伴いつゝ用いられないと、慣習的には、群飛する小柄な鳥の感じを讀者に傳え勝ちであつて、白鳥のような異数のものには必ずしも應はしくない。この句くらい、「海は波の立つところだ」という新らしい感覺的再認識を與える句はない。「叩き」も

ピツタリしている。波が―これも翼をひろげようとする生き物のように―押しよせてはずみ、白鳥の羽翼(が)音(を)たてゝ、羽搏かれて其波頭を叩いたのである。「叩く」で其時のやはらかで、短く、冴えていた音其物が如實に傳はつてくる。

第三句―原作は「發たんか白鳥翼に黒き羽見ゆる」であつた。「發たんか白鳥」という一語を叫んで、作者の魂は海上にとんで、白鳥其物に化してしまつた機微の間である。おめおめしてはいけない。愚圖々々してはならない。「見ゆる」などと、海岸に佇立する作者自身の肉眼の座え、空しく舞い戻つてきて、そこえ不甲斐ない金縛りなどになつてしまつて相成るものか。但しこの瞬間を、詩的瞬間として撰んだ作者には感謝する。私はお蔭で「生ける白鳥」を體驗した。

第四句―原作は「白鳥の海ゆ肩よせ相ひ戻る」であつた。私は卒讀、白鳥の群れの活寫に終始したものとのみ解し、その魅力に掩はれ盡した。ところが、雜詠欄選後、この句にかえつて再吟味しているうちに、作者の意圖したもの、私の理解したものとはまるで相違しているのではないかしらという疑懼を抱くにいたつた。即ち―作者の意圖は、海上の、鮮かにも冴えた白鳥の姿を眺めつゝけた果てに自分等一行は、寒さの中に、肩よせあつて、ふたたび黙々と、海を背にして岸ふかい塵界の町へ歸つてきた―との意味である。白鳥が點在することによつてこそ、この世ならぬ景觀を呈したものの、もともと暗鬱の津輕の海邊と人界とである。その氣息は、その意味の下の句としても、十分に讀者に通じて面白いのであるが、私は最初にこの句から、私流の解釋の下に受けた感動が餘りにも鮮やかであつたのを撤回し兼ねて、一應私の我儘を通さして貫つて斯く「の」の一語を「は」の一語に、搖がぬ境界標の石として据えさして貫つたのである。「は」と定めれば、句意も亦、次のように決定し

てしまふ。海上はるかへ出て、四散したまゝになつていた白鳥が、やがて夕刻になる頃ほひ、おのづから一所へあつまつて、左右にひろい横列となり、あの獨特の高くかゝげた首をそろえ、西洋婦人の乳房の胸のように、張りつゝもなだらかに傾斜した胸をそろえ、伸むつまじげに、疊みつゝも半ば疊み餘したように豊かに湧き立つ翼の肩を寄せあつて、海岸よして戻つてくるその有様である。

第五句―原作のまゝである。「……風海に吹き砂に吹く」「……風海を吹き砂を吹く」というやうに表現すれば、勿論なだらかであるに相違はない。しかし、それは、「しらべのためのしらべ」に墮する。子規が「飴細工の鬘」といつたのは、寫生眼其物のきびしさと着實さとに就いていつたのだがリズムも「飴細工のリズム」であつては残念至極である。(現在の俳壇には、飴細工のリズムが餘りにも多すぎる。そして根本的には無自覺なまゝでの、表面的なそれえの抗議としての、餘りにも佞屈のための佞屈なりズムが横行している。假りに、形容すれば、「おろし金のリズム」のようなものさきもある、實狀である。それで讀者の神経を大根おろしにおおして痛快がる)この句の表現え話をもどす―假りに掲げてみた「風海に吹き砂に吹く」式の表現では、すべてのもの(對象)が、平行化に分散してしまふのである。そして、なまぬるい焦點のない所謂「ほのぼのの哀感」「ほのぼのの氣分」だけがのけるのである。この場合、白鳥其物は宙外え忘却されてしまふ。この句に於ては、白鳥は飽くまでも海に結びつき、海に残されているのでなければならぬ。さればこそ「海に風吹き」であつて、終夜吹き漂はされるであらうところのあはれさを打出している。「砂を吹く」は、海を(つまり白鳥を)吹き立てる風の餘勢を述べたのに過ぎない。斯く判明すれば、この句の原作の表現の、一種の「軋り」は、ぬきさしならない必然さからきていることがうなづける筈である。

寄贈感謝

萬緑発行所『萬緑』1月号

1ページを割いて、成田千空研究会・千空著作物をご紹介します。

浅利康衛さん(青森市) 俳誌『まほろば』1・2月号

野沢省悟さん(青森市) 『牧羊神』第2巻 第1号

(高校時代の寺山修司発行)

「実作者の覚書」成田千空のコピー。

齋藤美穂さん(五所川原市) 『青森県句集』コピー

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)

2. 回想の成田千空(2000字以内)

締め切り 第10号は4月末、到着順に掲載します。

送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

千空没後10年記念イベント

日時 5月21日(日) 13時30分～15時

場所 青森県近代文学館(入場無料)

内容 ①朗読会&解説員による朗読

「寺山修司と成田千空」

②千空研究会メンバーによるおはなし

*2月25日(土)～5月24日(水) 県俳句懇話会

寄贈資料展が開催され、千空資料も展示されます。

*千空研究会メンバーの顔合わせの機会でもありますので、お出でをお待ちしています。

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

会員名簿(51名)

〈青森市〉浅利康衛、高森ましろ、成田春生、西谷ともえ、野沢省悟、浜田しげる、未津きみ、吉田州花

〈平内町〉佐藤陽子

〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、佐藤繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之

〈藤崎町〉清水雪江、世良啓

〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉日野口晃、米田省三

〈五所川原市〉荒閑映子、一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉木村武彦

〈中泊町〉外崎文夫

〈つがる市〉兼平一子

〈深浦町〉草野力丸、山本こう女

〈岩手県盛岡市〉瀬川君雄

〈茨城県那珂市〉矢須恵由

〈千葉県流山市〉藤埜まさ志

今年の会費をお払い込み下さい

2017年の会費をお願い致します。同封の振替用紙により、1000円をお払い込み願います。

2017年会費領収しました

佐藤繁、浜田しげる、藤埜まさ志、矢須恵由

☆北極星☆

○千空さんが逝ってから早いもので10年になる。5月21日、県近代文学館で「没後10年、千空を語る」のイベントが開かれる。(上段にお知らせ) 会員のみならず、ぜひご参加を。

○没後10年、評伝の刊行をめざしてきたが、予想以上に資料が多く作業が遅れている。今しばらくご猶予いただきたい。

○今回も師・中村草田男の千空句評を再録した。俳句の奥深さを感じさせる批評である。難解であるが読んで千空句の神髄に触れてほしい。

○今号の版画は目屋人形。炭焼きやマタギで生計を立てていた山村の西目屋村。炭運びはもっぱら女性の仕事だった。民俗調査では、つらかったという話を聞いた。お土産人形に着目した一句が、愛らしい版画となった。

○西谷ともえさんの「千空資料研究」が始まった。齋藤美穂さんの「永住の地五所川原」は、ようやく「暖鳥文庫」にたどりついた。これからの楽しみ連載である。

○会報配布を希望する人は少ないだろうと考えていたが、関心を持ってくださる方がすこしずつ増えて、50人を超えた。ありがたいことである。

2017年2月23日発行
会報『千空研究』第9号

非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-35-5323
0173-35-8414
FAX 0173-35-8414